

口唇裂患者の化粧による外観変化と内面変化について

大阪大学大学院歯学研究科顎口腔病因病態制御学講座口腔外科学第一教室

古郷 幹彦

As a final treatment, we used a make-up for cleft lip patients. In this study, we analyze the effect on the mental stress of cleft lip patients. Professional make-up treatment was performed on the patients face. The five types of stress (recognition, body, life, social, total) were evaluated before make-up and after. The surgical lines on the upper lip were almost diminished with the professional make-up. Higher stress was recognized before make-up treatment. Each type of stress was reduced with make-up treatment.

1. 緒 言

大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科で初診した1977年から2002年までの25年間の口唇裂患者は1681人である。いわゆる口唇口蓋裂患者の75%であった。うち口蓋裂を合併するものは約70%であった。口唇口蓋裂は我が国においては約600人に1人の割合で発生する疾患であり¹⁾、先天異常の中でもその発生数は多いとされる。古くは口唇裂患者は手術痕跡が瘢痕として目立ち、さらに口蓋裂を合併していれば著しい上顎の発育不全も審美性に障害を与えた。そこで口唇裂初回手術においてはミラード法・テニソン法をベースにしながら様々な改良が加えられてきた。さらに顎裂部への二次的骨移植術、顎変形の著しい症例には顎骨骨きり術、その他、口蓋裂の手術法の改良など顎の形態の著しい改善も行われてきた。ことに顎骨への手術的アプローチ法も仮骨延長術などで画期的に進歩したことなどから、顔面形態という点ではかなり改善した。このような近年の医歯学の発達により口唇口蓋裂患者の治療に関しては形態的にはかなり審美的改善ができるようになった。また縫合法についても新たな吸収性縫合糸の開発などによって瘢痕が著しく目立つこともなくなってきた。しかしながら手術瘢痕を完全に消失させるところまでは至っておらず、微細にしろ残存することはやむをえない。患者はこの点について精神的苦痛を大小の違いがあるが感じていることは事実である。先天異常を顔面に持つことは社会生活上、本人に精神的ストレスをかけることはしばしばと思われる。このような事態をいかに把握するかは医療を行う上で重要なポイントともいえる。一方近年の化粧の技術の発達は目覚し

いものがあり、皮膚表面の瘢痕を肉眼的に不明瞭にすることを可能にした。少なくとも化粧をすれば口唇の瘢痕は見えなくすることができる。このことが患者の精神的ストレスを改善できる可能性は十分にあると考える。そこで本研究は化粧を用いることにより患者の口唇裂瘢痕を消失させることができることを内面に与える効果について検討した。

2. 方 法

大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科で総合治療を受けた口唇口蓋裂患者のうち口唇裂を有する22名に対し、化粧の指導を行った。患者の内訳は10歳代6人、20歳代12人、30歳代3人であった。

大阪大学歯学部附属病院の約20年前の口唇口蓋裂治療のスケジュールは

初回口唇形成術 3ヶ月

初回口蓋形成術 1歳2ヶ月から1歳6ヶ月

(言語治療:顎口腔機能治療部にて良好と判断されるまで)

(歯列矯正治療:永久歯萌出以後)

顎裂部二次骨移植術 10歳から13歳

口唇外鼻二次修正術 16歳から18歳

であった。

全員が口唇外鼻二次修正術まで修了していた。

内面審査

内面審査は大阪大学歯学部附属病院で患者に直接承諾を得たものである。熊本大学式ストレス尺度を用い、別紙アンケート調査を指導直前と指導直後に行った。患者個人が直接質問シートに記入する方式で行った。

患者ストレスを認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的自己評的ストレスに分け、それぞれの項目を無秩序に並ぶように質問項目を以下のごとく設定した。

それぞれのストレスについて化粧指導前と指導後で比較し内面における化粧の効果について検討した。

評価は勝俣瑛史氏・篠原弘章氏による熊本大学式ストレ



The effect of makeup on psychological status of cleft lip patients.

Mikihiko Kogo

First Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Osaka University Graduate School of Dentistry

質問シート

	非常 に ま る	あ か て な は り ま る	あ 少 し て は ま る	あ ま つ た く ま る
01. 美しい花をみても、美しいと感じられない	4	3	2	1
02. 自分のスタイル（体型）や容貌のことがとても気になる	4	3	2	1
03. 人に自分の心（気持ち）を開くことができない	4	3	2	1
04. 何かに挑戦したり、何かをやろうとする意欲がわからず、「何もしたくない」と思う	4	3	2	1
05. 自分は「人から愛されていない」と思う	4	3	2	1
06. 自分の考えや気持ちを十分に言葉で言う（表現する）ことができない	4	3	2	1
07. 胃や心臓などの内臓器官の調子が悪いと感じる	4	3	2	1
08. 人前で、もっとうまくしゃべれたらなあと思う	4	3	2	1
09. 何かしようとしても、いざとなると実行することができない	4	3	2	1
10. 自分は誰からも愛されていない気がする	4	3	2	1
11. 物事を判断したり、自分の考えを決めることができない	4	3	2	1
12. 性的問題（月経、マスターべーション、性器の問題など）とても気になる	4	3	2	1
13. 人に親しみを感じられない	4	3	2	1
14. 何かをしようとしても、すぐいやになり続けられない気がする	4	3	2	1
15. 自分は「人から必要とされていない」と思う	4	3	2	1
16. 何かしようとしても気が散って、集中することができない気がする	4	3	2	1
17. 歩いて買い物に出かけたり、散歩したり、スポーツをしたりなど、体を動かす気持ちになれない	4	3	2	1
18. 人を信じられないと思う	4	3	2	1
19. やるべき事があるのに、なまけてしまう気になる	4	3	2	1
20. 自分のことを「人にわかってもらえない」と思う	4	3	2	1
21. 何か考えると、いろいろな考えが浮かばない	4	3	2	1
22. 頭痛、腹痛、発熱、吐き気、体のだるさ、肩こりがあり、つらい	4	3	2	1
23. 人と一緒に何かするのは苦痛（いや）だと思う	4	3	2	1
24. 朝、起きなければならない時間になってしまって起きられない気がする	4	3	2	1
25. 「自分はだめな人間だ」と思う	4	3	2	1
26. 何か覚えようとしても、なかなか覚えられないと思う	4	3	2	1
27. 心配事があって、よく眠れない気がする	4	3	2	1
28. 何かするとしても、人と一緒にしたくないと思う	4	3	2	1
29. いろいろなことががまんできない	4	3	2	1
30. 自分に自信が持てない	4	3	2	1
31. 今のままの成績や評価ではだめだと思う	4	3	2	1
32. 表情や動作が固いと人から言われる	4	3	2	1
33. 人と話したくないと思う	4	3	2	1
34. 病気以外の理由で、学校（会社・習い事など）休みたい	4	3	2	1
35. 楽しい事がほとんどないと思う	4	3	2	1

ス尺度（インターネット公開）に沿って行った²⁾（表1）。それぞれのストレスについて化粧指導前と指導後で比較し内面における化粧の効果について検討した。認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的ストレスについて各々メイク前後での変化を統計学的に検定した。検定は paired-t test (パラメトリック検定で対応のあるt検定) を用い危険率は5%に設定した（両側検定）。

3. 結 果

認知的ストレスについて、メイク前には対象者の平均が12.36であったのに対してメイク後には11.27と減少し、統計学的検定の結果 $p=0.009$ (<0.05) で統計学的有意に認知的ストレスはメイク後減少した。

次に身体的ストレスについて、メイク前には12.22、メイク後には10.32と減少し、統計学的検定の結果 $p=0.001$ (<0.05) で、統計学的有意差を認めた。

社会的ストレスについて、メイク前には11.82、メイク後には10.27と減少し、統計学的検定の結果 $p=0.01$ (<0.05) で、統計学的有意差を認めた。

生活的ストレスについて、メイク前には12.05、メイク後には10.27と減少し、統計学的検定の結果 $p=0.005$ (<0.05) で、統計学的有意差を認めた。

総合的ストレスについて、メイク前には11.81、メイク後には10.09と減少し、統計学的検定の結果 $p=0.001$ (<0.05) で、統計学的有意差を認めた。

すなわち統計学的検定の結果全ての項目で統計学的有意にメイク後ストレス値が減少した。平均値の差を見ると、リハビリメイクによって、認知的ストレスで1.09、身体的ストレスでは1.90、社会的ストレスでは1.55、生活的ストレスでは1.78、総合的には1.72 ポイントのストレス軽減を認めた。これを化粧前のそれぞれのストレスを1.0としてその変化率で示すと図1のようになる。変化率では身体ストレスが84.3%と最も縮小し、生活ストレス、総合的ストレス、社会的ストレス、認知的ストレスの順に縮小した。最も変化の少なかった認知的ストレスで91.5%であった。化粧後の年代別ストレスの平均値を図2に示す。化粧後のストレス残留は20歳代が最も高く11前後で、10歳代、30歳代の順に少なくなった。30歳代で9前後であった。

表1

問題番号	スコア										
		認知的 ストレス	身体的 ストレス		社会的 ストレス		生活的 ストレス		総合的自己知的 ストレス		
01	4 3 2 1	02	4 3 2 1	03	4 3 2 1	04	4 3 2 1	05	4 3 2 1		
06	4 3 2 1	07	4 3 2 1	08	4 3 2 1	09	4 3 2 1	10	4 3 2 1		
11	4 3 2 1	12	4 3 2 1	13	4 3 2 1	14	4 3 2 1	15	4 3 2 1		
16	4 3 2 1	17	4 3 2 1	18	4 3 2 1	19	4 3 2 1	20	4 3 2 1		
21	4 3 2 1	22	4 3 2 1	23	4 3 2 1	24	4 3 2 1	25	4 3 2 1		
26	4 3 2 1	27	4 3 2 1	28	4 3 2 1	29	4 3 2 1	30	4 3 2 1		
31	4 3 2 1	32	4 3 2 1	33	4 3 2 1	34	4 3 2 1	35	4 3 2 1		
合計 得点		合計 得点		合計 得点		合計 得点		合計 得点		合計 得点	

ストレス変化率

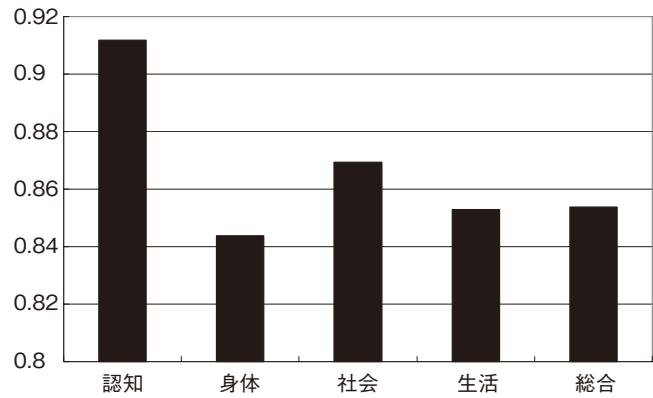


図1: 化粧による各ストレスの変化率

化粧後、身体的ストレスが最も減少し、生活的ストレス、総合的ストレス、社会的ストレス、認知的ストレスの順に減少した（化粧前の各ストレスを1.0とする）。

年代別ストレス平均値

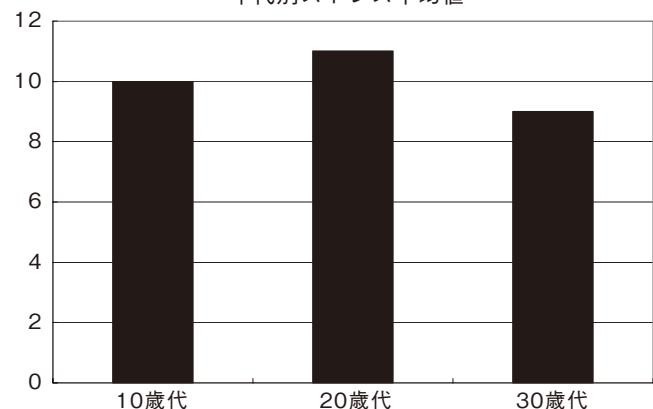


図2: 化粧後の年代別ストレス平均値

化粧後、20歳代がストレスが他と比べてわずかではあるが最も高く、10歳代、30歳代の順であった。

4. 考 察

口唇口蓋裂の中でも口唇裂を有する患者は顔面にわずかでも治療の痕跡を残すことから自分自身の口唇の状態に神経質になっていることが少なくない。このことが患者をストレスという形で精神的に圧迫していることは十分に考えられる。この点は口唇裂を有しない口蓋裂単独患者とは大きく違うものと推定される。

顎発育をコントロールでき、咬合の確立が成功した患者は口唇の瘢痕を除けば数メートルはなれば形態は殆ど正常に近い。今回の研究でそこに専門のマークを施すと口唇裂の痕跡が全くと言ってよいくらい素人的な目では正常と判別がつかなくなった。少なくとも化粧をしている間は口唇裂をもたない健常人と同じ外見と言ってよい。化粧によって我々医療側も口唇裂の術後瘢痕がいかに人として意味のないものであるか本人に見せることができることに気づいた。しかしそれでもなお患者本人のストレスは全項目でいまだ平均約 10 であったことは特筆に値する。

ストレスを研究する際に、人のストレスの程度を計測することは非常に難しい。客観的に評価を行うことは今後の患者の検討を行ううえで非常に重要である。日常のストレスを熊本大学方式は認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的自己評的ストレスに分類している。本研究結果では認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的自己評的ストレスのすべての項目で化粧前は平均が 12 前後であり、化粧後では全ての項目で平均が 10 前後であった。また全ての項目で有意差をもってストレスが軽減された。このことは化粧が単に口唇の傷を見えにくくするというだけではなく、患者の持つストレスの減少に役立つことを示している。数値的には 1 以上 2 以下の差であった。変化率で言うと身体ストレスが最も影響を受け 84%、認知ストレスが最も変化が少なく 92% であった。これを僅差と考えるか否かは様々な意見があると思う。しかし、2 つのアンケートの時間差がおよそ 1 時間以内である。すなわち変化のしにくい短時間内の差であることから化粧はある一定の効果を患者の内面にもたらすと結論付けることができると思われる。また認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的自己評的ストレス全てで有意差があったことは見方をかえれば口唇裂という事実は認知的ストレス、身体的ストレス、社会的ストレス、生活的ストレス、総合的自己評的ストレスという全てのストレスに影響していることを示すものである。今後の治療においてはこれら患者のストレスに対する配慮が重要となる。

短時間内に同じ質問をすることは質問と答えの記憶もあり通常結果は変化しにくい。月あるいは週を隔てればゆっくりとした心の変化から明確な差となって現れることも考

えられる。この場合、その間に別の因子が介在しやすくなることも考えねばならない。したがって研究を複雑なものにしてしまう可能性が考えられる。本研究では間に介在する他の因子を可及的に排除することが研究の端緒としては必要であった。

口唇裂という疾患は先天異常であることから癌などとは違い、形態的には問題なくとも患者は疾患の治癒ということを認識できないことが多い。口唇裂という疾患を一生身に持っていると考えることが多い。そのことが日常の多くの面にストレスとなって現れる。しかし化粧という手技で少しでも確実にストレスが軽減することが本研究によって明らかになった。すなわち傷が見えることのストレスが化粧で軽減したと考えるのが適当であろう。

化粧後の年代別ストレスは 20 歳代が最も高く、10 歳代、30 歳代の順であった。これは 30 歳代が最も化粧への理解があるためかもしれないが今後の検討課題となった。10 歳代の女性は化粧を始めたばかりか、これから始めるところであり純粋さをもって協力してくれたのに対し、20 歳代の女性は自己の方法との葛藤があったかもしれないが、それぞれの年代の女性による対応の違いは特筆すべきであろう。

今までの治療技術の進歩により機能的にも形態的にも著しく改善できるようになった。しかしながら患者の心に踏み込むことはまだできていないように感じている。患者が口唇にあまり気を使うあまり、眉や頬などの所への日頃の配慮が健常人と比べて少なくなっている症例も多く認められた。また外観においても今まで眼周辺に視点をおくことがいかに顔貌に変化を及ぼすかを認識できなかった患者もいた。現在化粧も進歩し 10 歳後半から 20 歳代の女性ならば今は常識となりつつある眉や頬の化粧に視点が行っていた。このことから患者の口唇への執着がいかに強いかも伺える。すなわち、心の顔の視点を口唇から離すこと、さらに外観のポイントを口唇から離すことを化粧は可能にした。このことがストレスの解消へとつながったことも考えられる。本研究により化粧は口唇だけでなく眼瞼周辺や眉、頬など患者自身の美しさを認識させる有効な手段であることに患者だけでなく医療を行う我々に気づかせる有効な手段であることを認識できた。また今後男性の化粧についても検討を行うことが必要と考えた。

5. 総 括

口唇口蓋裂治療の最終段階で化粧を行うことによる精神面の効果について検討し以下の結果を得た。

1. 口唇口蓋裂の医療的治療後でも全体的にストレスが高いことが示された。
2. 化粧により認知・身体・社会・生活・総合の各ストレスが 84% から 91% 程度に有意に減少することが明ら

かとなった。

3. 口唇口蓋裂患者に対する化粧は患者の精神面で非常に有効であることが示された。

謝 辞

本件を遂行するに当り、REIKO KAZUKI 事務所のかづきれいこ氏、大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科口唇口蓋裂専門外来担当の先生方、同看護部長西尾善子氏、同副看護部長 池 美穂氏に多大なるご協力を頂いたことに御礼申し上げるとともに、REIKO KAZUKI 事務所のスタッ

フの皆様、大阪大学歯学部附属病院第一口腔外科の教室員の皆様のご協力に深く感謝いたします。

(参考文献)

- 1) 足立忠文、古郷幹彦、岡田 元、ほか 6 名：大阪近郊における唇裂口蓋裂の発生について。大阪大学歯学雑誌、41 : 240 – 247, 1996.
- 2) 篠原弘章・勝俣暎史：熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性 (1): 小学生の「感情・態度」および「希望」との関係. 熊本大学教育学部紀要, 49, 93-108, 2000.